

白山麓白峰方言の変容と方言意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00007240

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



白山麓白峰方言の変容と方言意識

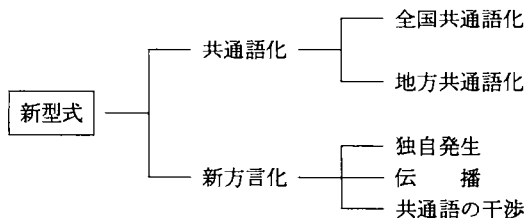
加 藤 和 夫

1. はじめに

戦後、特にテレビを中心としたマスメディアの発達によって、全国各地の伝統的方言が共通語化という大きな流れの中に身を置いて変容しつつあることは周知の事実である。しかし、その変容の様相はというと、未だに共通語に強い抵抗意識を持ちながら自分たちの方言を使い続けている関西地方、共通語の影響を受けつつも地域独特の新表現を多く生み出している九州地方、共通語化が著しく進んでいるものの場面的変種としての方言も比較的に残している東北地方など、全国各地で多様な状況が見られる。

本稿では、石川県内方言の中でも、従来「言語島」としてその独自性や古態性が注目されてきた白山麓^{しらみね}白峰方言の変容の実態について、最近の調査結果をもとに報告、考察する。あわせて、方言の変容と少なからぬ関わりをもつと思われる、方言や共通語に対する意識の世代差や性差についても言及する。

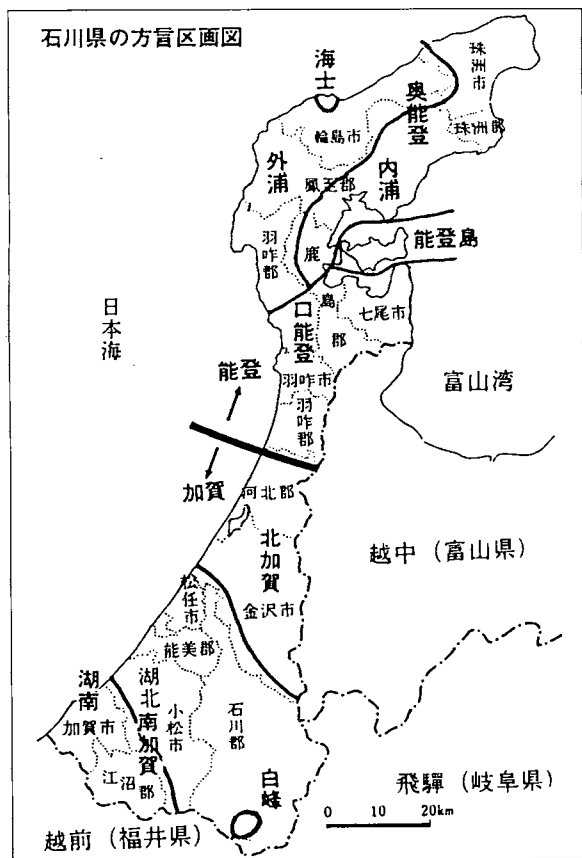
ところで、伝統的方言が変容して新しい形式に変わる場合に、大きく次のようなケースが想定される。なお、本稿で共通語化と言う場合は全国共通語化をさす。



・ 徳川・真田編（1991）P. 109 を参考に書き改めた

2. 白峰村方言の言語変容

図1



川本栄一郎 (1992) より

の結果をもとに、白峰村方言の変容について、世代差、性差を中心に報告する。なお、1993年調査には金沢大学教育学部学生17名（大学院生2名を含む）、1994年調査には同学生16名（大学院生2名を含む）および福井大学教育学部学生、大学院生各1名の計18名が参加した。

参考：白峰村の世帯・人口 367世帯・1,272人（1993.4.1現在）

従来から石川県内方言の中では、その独特の言語的特徴の存在から「言語島」（図1参照）として注目されてきた白峰方言も、最近では世代が若くなるにつれて白峰方言特有の特徴が次第に薄れつつあり、大きく分けると共通語化と地方共通語化（加賀・金沢方言化）の二つの動きが見られる。

本稿では、金沢大学教育学部夏季集中授業「国語学実習／方言論実習」の一環として、1993年と1994年の夏に行なった白峰村多人数調査（今回資料として載せた話者の数は1993年調査が77名、1994年調査が54名）

2.1 古態性の現状

岩井隆盛 (1959) (1962), 川本栄一郎 (1974) などと言及されているように、白峰村方言、特に字白峰 (旧牛首) 方言には、他の北陸方言では既に消えてしまった古い日本語

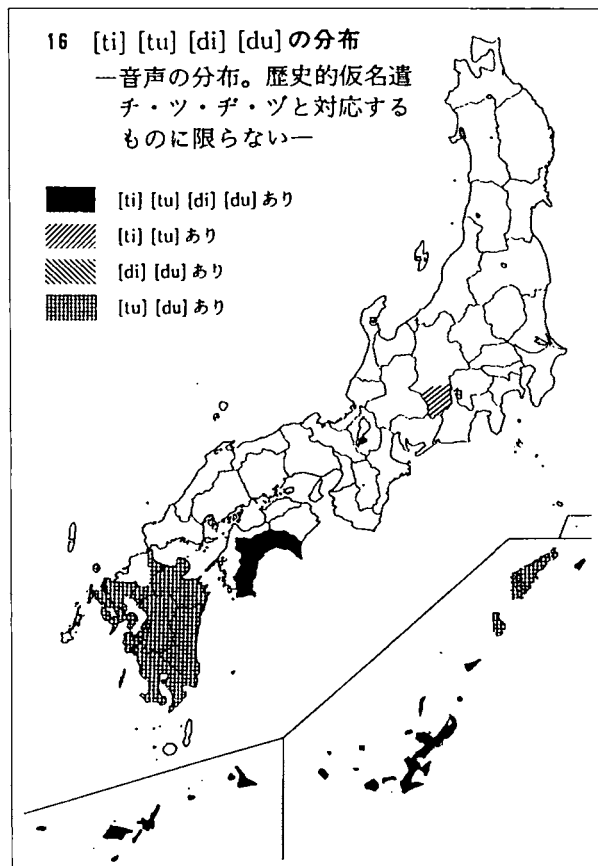
(中央語) の名残と思われる語や言語的特徴が少なからず存在している。

音声的には、共通語の「つ」に相当する音に破擦音 [tsu] でなく破裂音 [tu] (図2参照) の存在が先行研究からも指摘されている。今回の調査項目中では、「梅雨」「唾」「つくばう (正座する)」「爪」で、それぞれ [tuiri] [turbake] [turbaw] [tu me] の形で、70 歳代～90 歳代の話者あわせて6名から聞かれた。国語史上、四つ仮名の「づ」にあたる [du] と同

様に存在したはずの古音 [tu] も、あと 20 年もすると白峰村方言からは聞かなくなるに違いない。

文法的には、バ行・マ行四段動詞におけるウ音便現象の存在が指摘されている。図3、図4は「喜んだ」「飲んだ」の調査結果である。文献国語史上は中

図2



(『日本方言大辞典 下巻』『音韻総覧』小学館より)

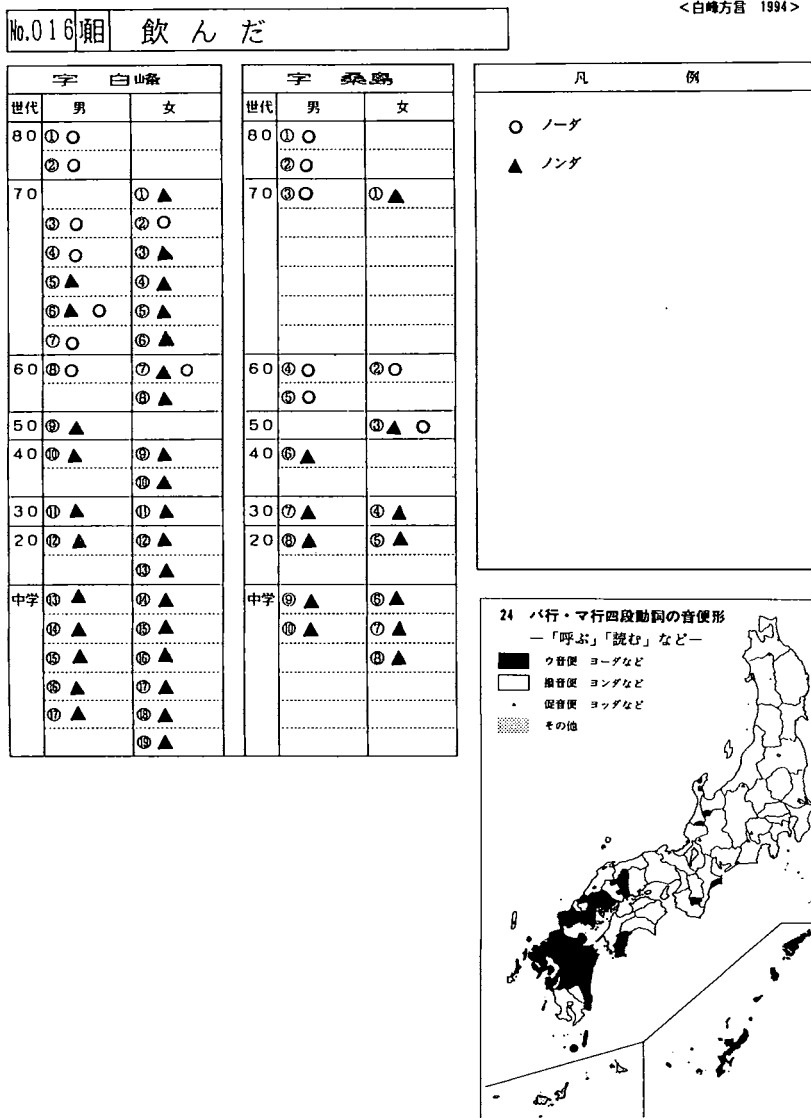
図 3 喜んだ

No. B2-1 項目 喜んだ

<白峰方言 1993>

字 白 峰			字 桑 島			凡 例	
世代	男	女	世代	男	女	○ ヨロコダ ◎ ヨロコダ ▲ ヨロコダ	
90	① ○		90				
80	② ◎	① ○	80	① ◎			
	③ ◎	② ▲		② ▲			
		③ ○	70	③ ◎	① ▲		
70	④ ○	④ ▲					
	⑤ ○	⑤ ○					
	⑥ ▲ ○	⑥ ○					
	⑦ ▲	⑦ ○					
	⑧ ○	⑧ ○					
	⑨ ○	⑨ ◎					
60		⑩ ○	60	④ ◎	② ▲		
		⑪ ◎		⑤ ▲			
		⑫ ○	50		③ ▲		
		⑬ ○ ◎					
50	⑭ ○	⑭ ▲					
		⑮ ▲ ◎					
		⑯ ▲ ○					
		⑰ ○					
40	⑱ ▲	⑱ ▲	40	⑥ ▲			
		⑲ ▲	30	⑦ ▲	④ ▲		
30	⑲ ▲	⑲ ▲					
	⑳		20		⑩ ▲		
20	⑱ ▲	21 ▲					
		22 ▲	中学	1 ▲	1 ▲		
中学	1 ▲	1 ▲		2 ▲	2 ▲		
	2 ▲	2 ▲		3 ▲	3 ▲		
	3 ▲	3 ▲		4 ▲	4 ▲		
	4 ▲	4 ▲		5 ▲	5 ▲		
	5 ▲	5 ▲					
	6 ▲	6 ▲					
	7 ▲	7 ▲					
	8 ▲	8 ▲					
	9 ▲	9 ▲					
		10 ▲					
		11 ▲					
		12 ▲					
		13 ▲					

図4 飲んだ



世の国語資料にみられるバ行・マ行のウ音便であるが、北陸地方でこの事象の分布が報告されているのは石川で白峰と奥能登、富山の五箇山のみである(図4付図参照)。図3、図4ではヨロコード、ノードのウ音便形は50歳代以上に見られ、今しばらくは老年層を中心に使用されるだろう。ただし、柳田征司(1993)など先学によって指摘されているとおり、バ行・マ行四段動詞のすべてにウ音便化が見られるわけではない。

1994年調査では、大正11年生まれの男性話者に、語幹末尾母音の違いを考慮してバ行15語、マ行37語についてウ音便化の有無を確認した。結果は、バ行では「喜んだ(ヨロコード)」のみ、マ行では「飲んだ(ノード)」の他、「編んだ(オード)」「噛んだ(コード)」「<鼻を>かんだ(コード)」「止んだ(ヨード)」「^{かじ}挫んだ(カジコード)」「^し染む(シューダ)」「^く苦しむ(クルシューダ)」「^も揉む(モード)」「^よ読んだ(ヨード)」「^{すい}吸込む(スイコード)」の11語でウ音便の使用が確認された。また、ウ音便の使用こそ確認できなかったものの、語幹末尾母音が[a]の「痛む、^{ひが}痒む、屈む、刻む、しゃがむ、たたむ、^{つか}攢む、挟む、^{ひが}僻む」は、それぞれ語幹末尾母音が[o]に変化したイトンダ、オゴンダ、カゴンダ、キゾンダ、シャゴンダ、タトンダ、ツコンダ、ハソンダ、ヘゴンダを使用するという。この事実は、かつてイトーダ、オゴード等のウ音便が存在したために、その形に語幹を揃えようとした結果生じた語形と考えることができそう。ただし、マ行でも文献国語史上指摘されているように、語幹末尾母音が[u]の語(「生む、汲む、済む、踏む、沈む、進む、包む、休む」)は、白峰でも撥音便しか聞かれなかった。

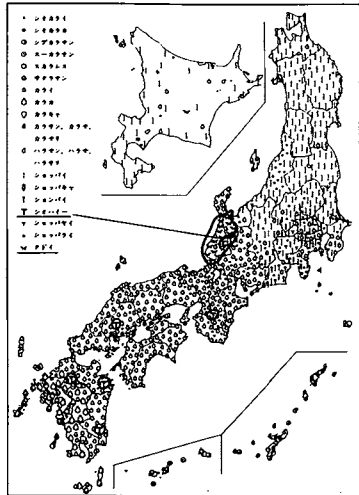
語彙的には、「地震」の意味の古語「なゐ」に由来するとされるネー、ネが分布することは岩井隆盛(1959)や『日本言語地図』(LAJ)にも載る(北陸では他に五箇山と佐渡にナイ、他は九州にナエ、沖縄にナイ、ネーが広く分布)が、今回の調査からは、一人の話者からも使用(理解語としても)が確認できなかった。ここ30年余りの間に白峰方言からは完全に消え去ったものと思われる。

一方、図5と図6は、それぞれ味の「塩辛い」と「うすい」の結果である。「塩辛い」では字白峰の男性で50歳代、女性で30歳代までに凡例のショーフェイスからショワイまでの類の語の分布がみえる。この語は『日葡辞書』(1603)に「シヲハユイ 塩辛いこと、塩味がすること」とあるシヲハユイに由来する

図5 塩辛い

No. G37 項目 (味が) 塩辛い				<白峰方言 1993>			
字 白峰				字 桑島			
世代	男	女		世代	男	女	
90	①	区		90			
80	②	男	① 男 女	80	①	男	
	③	男	② 男 女		②	男	
			③ 男				
70	④	男	④ 男 女	70	③	男	① 男
	⑤	男	⑤ 男 女				
	⑥	男 女	⑥ 男 女				
	⑦	男 女	⑦ 男 女				
	⑧	男	⑧ 男				
	⑨	男	⑨ 男				
60			⑩ 男 女	60	④	男	② 男
			⑪ 男		⑤	男	
			⑫ 男 女				
			⑬ 男				
50	⑭	男 女	⑭ 男 女	50			⑬ 男
			⑮ 男 女				
			⑯ 男 女				
			⑰ 男 女				
40	⑱	男	⑱ 男 女	40	⑥	男	
			⑲ 男				
30	⑳	男	㉑ 男 女	30	㉑	男	④ 男
	㉒	男					
20	㉓	男 女	㉔ 男 女	20			⑤ 男
			㉕				
中学	1	1	男 女	中学	1	1	男 女
	2	2	男 女		2	2	男 女
	3	3	男 女		3	3	男 女
	4	4	男 女		4	4	男 女
	5	5	男 女		5	5	男 女
	6	6	男 女				
	7	7	男 女				
	8	8	男 女				
	9	9	男 女				
		10	男 女				
		11	男 女				
		12	男 女				
		13	男 女				

しおからい (塩辛)



(『方言の辞本』 小学館より)

図6 うすい

<白峰方言 1993>

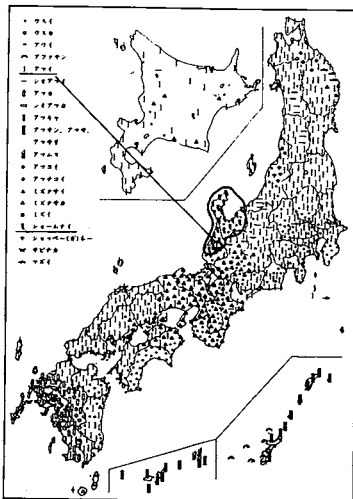
No.G37※ 項目 (味が) うすい

字 白峰		
世代	男	女
90	① □	
80	② ヲ	① □
	③ ヲ	② ㄥ
		③ ●
70	④ ㄱ	④ ㄱ
	⑤ ㄱ	⑤ □
	⑥ □	⑥ ㄱ
	⑦ □	⑦ ヲ
	⑧ ㄱ	⑧ □ ㄱ
	⑨ ●	⑨ ㄱ
60		⑩ ㄥ
		⑪ ㄱ
		⑫ ㄱ
		⑬ ㄱ
50	⑭ ㄱ	⑭ □ ● ●
		⑮ □ ●
		⑯ ㄱ
		⑰ ㄱ ●
40	⑱ ●	⑱ ●
		⑲ ●
30	⑳ □	㉑ ㄱ
	㉒ ●	
20	㉓ ●	21 ●
		22 ●
中学	1 ●	1 □ ●
	2 ●	2 ●
	3 ●	3 ●
	4 ●	4 ●
	5 ●	5 ●
	6 ●	6 ●
	7 ●	7 ●
	8 ●	8 ●
	9 ●	9 ●
		10 ●
		11 ヲ
		12 ●
		13 ●

字 桑島		
世代	男	女
90		
80	① □ ㄱ	
	② □	
70	③ ㄱ	① □
60	④ □	② □
	⑤ □	
50		③ □
40	⑥ □ ●	
30	⑦ ●	④ ●
20		⑤ ●
中学	1 ヲ ●	1 ●
	2 ●	2 □
	3 ●	
	4 ●	
	5 ●	

凡 例	
□	アマイ
ㄱ	アーマイ
ㄱ	アーミヤ
ㄱ	アーミヤ
ㄱ	アーミヤ
ㄱ	シオムナイ
ㄱ	シオムニヤ
ㄱ	シヨームナイ
ㄱ	シヨモナー
ㄱ	シヨ(-)モナイ
●	ウスイ
●	ウーシ
●	ウーシー
●	ウッシー
ㄱ	シオケタラン
ㄱ	シオケナイ

(塩味が) うすい (薄)



(『方言の読本』 小字館より)

ものと考えられる。中学生も含め、北陸地方共通語とも言えるクドイ（図5付図参照）が広く分布する中で、まだ根強く使用されている。

図6「うすい」では、北陸では白峰を除いてほとんど確認できなくなったアマイの類（図6付図のLAJ略図からも「塩味がうすい」ことを表現する最も古い形と考えられる）が、字桑島^{くわじま}も含めかなり若い世代にまで分布している。この表現に関しては、アマイの類の後に北陸地方共通語的ショームナイの類の伝播がほとんどみられず、30歳代以下で共通語形ウスイの浸透が顕著である。

2.2 白峰方言の独自性の現状

図7では白峰方言の象徴とも言える自称代名詞ギラの分布を見る。「ギラの里白峰」というキャッチフレーズが使われることさえあるほど、ギラは白峰の方言を代表する言葉と意識されている。全国で白峰にしかない言葉（京都・八瀬にゲラ）という意識がそうさせるのであろう。結果をみると、特異な形でありながら中学生男子のギャー（[gira]>[gia]>[gja:]）を含め、現在までよく生き続けていることがわかる。ただ、音声的響きから女性には好まれないようで20歳代以下の女性の共通語化が目立つ。なお、ギラと同様白峰独特の表現とされる挨拶表現のヨシタイ、ヨシタイの類（「ありがとう」の意。「よう（良く）した」の意であろう。図8）、ノイノ（「さようなら」の意）や、逆接の接続助詞「～けれども」にあたる～ケット（～ケッド）、接続詞「だから（そうだから）」にあたるサンジャサカイ（シャンジャサカイ、ハンジャサカイ）、文末詞「～ね」（図9）にあたる～ニャーなどの分布は、いずれも図7に似て、中学生を含む若い世代にまで根強く使用されていることがわかる。少し大げさかもしれないが、こうした表現形式を使うことで、自分自身が、あるいはお互いが白峰人であることを確認し合うような意識があるのではないだろうか。こうした意識が、白峰独特の方言（しかも使用頻度の比較的高いもの）の共通語化を比較的遅らせることになったと思われる。

2.3 その他の表現形式の現状

2.3.1 地方共通語化

図10は共通語の「～ている」に相当する表現を尋ねた項目の一つである。白峰村方言の場合、進行態・結果態いずれにおいても～ Cholという、北陸地

No. G1	項目	わたし（自称代名詞）
--------	----	------------

字 白峰			字 桑島			凡 例	
世代	男	女	世代	男	女		
90	① △		90			△	キラ
80	② △	① △	80	① □		▲	ギャー
	③ △	② △ ●		② □		▽	ギャ
		③ △				□	ウラ
70	④ △	④ △	70	③ □	① □	+	ワシ
	⑤ △ +	⑤ △				●	ワタシ
	⑥ △	⑥ △				●	アタシ
	⑦ △ +	⑦ △				▲	オレ
	⑧ △	⑧ △				■	ボク
	⑨ △ +	⑨ △				▼	ジブン
60		⑩ △	60	④ □	② □ ●		
		⑪ △		⑤ □			
		⑫ △ ●					
		⑬ △					
50	⑩ △	⑭ △ ●	50		③ □		
		⑮ △ ●					
		⑯ ●					
		⑰ △					
40	⑪ △	⑱ △	40	⑥ □ ▼			
		⑲ ●					
30	⑫ □	⑳ △	30	⑦ □	④ ●		
	⑬ △						
20	⑭ △	21 ●	20		⑤ ●		
		22 ●					
中学	1 △	1 ●	中学	1 △ ▼	1 ●		
	2 △ ■	2 ●		2 △	2 ●		
	3 △ ▼	3 ●		3 ■			
	4 △	4 ●		4 △ ▲ ■			
	5 △ ■ ■	5 ●		5 △ ▲			
	6 △	6 ●					
	7 △ ■	7 ●					
	8 △	8 ■					
	9 + ■	9 ●					
		10 ●					
		11 ●					
		12 ●					
		13 ●					

図8 ありがとう

<白峰方言 1994>

№085 ありがとう

字 白山麓		
世代	男	女
80	① ○ ▽	
	② ○ ●	
70		① ○
	③ ○ ● ▽	② ○ ▽
	④ ○ ▽	③ ○ ●
	⑤ ○	④ ● ▽
	⑥ ○ ●	⑤ ○
	⑦ ●	⑥ ○ ▽
60	⑧ ○ ▽	⑦ ○ ●
		⑧ ○ ▽
50	⑨ ○	
40	⑩ ○	⑩ ○
		⑩ ○ ▽
30	⑪ ○	⑪ ○
20	⑫ ○ ▽	⑫ ▽
		⑬ ○ ▽
中学	⑭ ○ ▽	⑭ ▽
	⑮ ○	⑮ ▽
	⑯ ▽	⑯ ▽
	⑰ ▽	⑰ ▽
	⑱ ▽	⑱ ▽
	⑲ ▽	⑲ ▽
		⑳ ▽

字 桑島		
世代	男	女
80	① ▽	
	② ○ ▽	
70	③ ○	① ○ ▽
60	④ ○	② ▽
	⑤ ○	
50		③ ○
40	⑥ ▽	
30	⑦ ○	④ ▽
20	⑧ ▽	⑤ ▽
中学	⑨ ▽	⑥ ▽
	⑩ ▽	⑦ ▽
		⑧ ▽

凡 例	
○	ヨシタイ, ヨシタイヨ(-)
●	ヨ-シタイ, ヨ-シタイヨ-
○	ヨシタヤ
●	ヨ-シタヤ
●	ヨ-サツジャツタ, ヨ-サツジャツタノ(-)
	ヨ-サツジャツテノー
▽	アリガト(-)
▽	アンガト
▽	アリガト-ゴザル(-)
▽	アリガト-ゴザイマス
▽	アリガト(-)ゴザイマシタ
	アリガト-ゴザリマシタ
	アリガト-ゴザイマシテ
▽	アリガト-ゴザツタ

字 白 峯		
世代	男	女
80	① △	
	② ● ○	
70		① △
	① △ ●	② △
	④ ●	③ △
	⑤	④ △
	⑥ △	⑤ △
	⑦ ●	⑥ ●
60	⑦ △	⑦ △ ● ●
		⑧ △ ●
50	⑧ △ ●	
40	⑧ ●	⑧
		⑧ ●
30	⑧ ●	⑧ ● ▽
20	⑨ ●	⑨ ●
		⑩ ●
中学	⑩ ●	⑩ ●
	⑩ ●	⑩ ●
	⑩ ●	⑩ ●
	⑩ ●	⑩ ○ ●
	⑩ ○	⑩ ●
		⑩ ●

字 彙		
世代	男	女
80	① ○	
	② ○	
70	③ ●	① ○
60	④ ㄩ	② ●
	⑤ ●	
50		③ ●
40	⑥ ●	
30	⑦ ●	④ ●
20	⑧ ●	⑤ ●
中学	⑨ ●	⑥ ●
	⑩ ●	⑦ ●
		⑧ ○

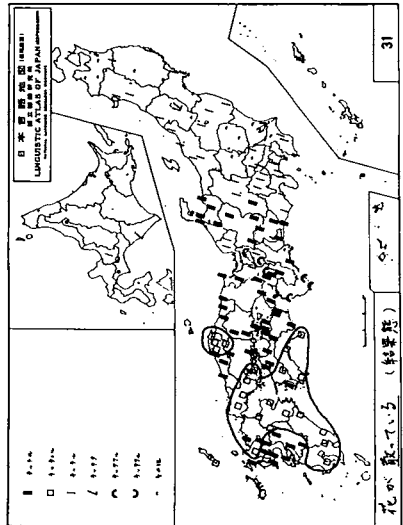
	凡	例
▲	ノクトカッタニヤー	
△	ノクトカッタ	
△	ノクトカッタネー	
△	ノクトカッタワイ	
▽	ヌクトカッタニヤー	
●	アツカッタニヤー	
○	アツカッタ（ー）	
◎	アツカッタネー	
⊖	アツカッタネア	
⊙	アツカッタナー	
③	アツカッタヤ（ー）、アツカッタヤニヤ	
	アツカッタワー、アツカッタワイ	
⊥	ヌクカッタネー	

図 10 散っている

No. B1-1 項目 (桜の花が) 散っている〈進行態〉

<白峰方言 1993>

字 白 峰			字 桑 島			凡 例	
世代	男	女	世代	男	女	□ チツ Chol ♀ チツトル ● チツテイル ● チツデル † オチテイル ‡ オチテル N 無回答, 誤答	
90	① N		90				
80	② N	① N	80	① □			
	③ ♀	② □		② □			
		③					
70	④ □	④ □	70	③ □	① □		
	⑤ □	⑤ □					
	⑥ □	⑥ □					
	⑦ □	⑦ □					
	⑧ □	⑧ N					
	⑨ □	⑨ N					
60		⑩ □	60	④ □	② □ ♀		
		⑪ □		⑤ □			
		⑫ □					
		⑬ □					
50	⑭ □	⑭ N	50		③ □		
		⑮ N					
		⑯ □					
		⑰ □					
40	⑱ ●	⑱ □	40	⑥ □			
		⑲ †					
30	⑳ □	㉑ □	30	㉒ □	④ ●		
	㉓ □						
20	㉔ □ ♀	21 ♀	20		⑤ ♀		
		22 ♀					
中学	1 N	1 ♀	中学	1 ♀	1 ♀		
	2 ♀	2 ♀		2 ♀	2 ♀		
	3 ♀	3 ♀		3 ♀			
	4 †	4 ♀		4 ♀			
	5 ♀	5 ♀		5 ♀			
	6 ♀	6 ♀					
	7 □ ♀	7 N					
	8 ●	8 ♀					
	9 ♀	9 †					
		10 ●					
		11 ‡					
		12 ♀					
		13 ♀					



方では他に富山・五箇山（図 10 付図で中国・四国・九州にも広く分布）にのみ聞かれる特徴的表現が分布する。[te oru]>*[tjoru]>[t̥joru]>[toru] の変化過程を経たものであろう。今回の調査でも 30 歳代以上の世代で盛んに使用されていることがわかった。20 歳代以下では、白峰方言としての内的変化ではなく、いわゆる金沢市方言を中心とした地方共通語形の影響によると思われる～トルに変化している。

また、図は示さなかったが、「降らなかった」（打消過去）の調査結果を見ると、伝統的方言形のフ^{ラン}ナ^ンダ^ナに対して、中学生を中心に西日本における新しい方言形フ^{ラン}カ^ッタ^ナ（フ^{ラン}と共通語形フ^ラナ^カッ^タの干渉によって生じた真田信治の言う「ネオ方言」形）が広まりつつある。フ^{ラン}ダは白山麓から流れ出す手取川^{てとりがわ}の下流域^{つるぎ}鶴来・辰口^{たつのくち}あたりで勢力を持つ方言形である。

～ンカッタのような共通語との干渉によるネオ方言形には、他に「高くなる」におけるタカナルや「行きたくない」におけるイキタナイなどがあり、20 歳代以下の若い世代で使われ始めている。しかし、これらも白峰独自の変化というよりは、いわゆる地方共通語化（加賀・金沢方言化）と見ることができそうである。

2.3.2 共通語化

一方、マスメディアを中心とした共通語の影響を強く受けて、若い世代を中心に共通語化が顕著な項目も少なくない。

図 11、図 12 は「買った」「借りてきた」（過去形<音便形>）の結果である。「買った」においては、現在もなお、若い世代を含め方言形のコータがよく使われている（同じ加賀地方でも手取川下流域の辰口の若年層ではコータよりも共通語形カッタが優勢）。「買わない」（打消形）の調査結果でも、ほぼ方言形カワン一色である。一方、「借りてきた」では、方言形カッテキタ（カッタ）が共通語の「買ってきた（買った）」と同音衝突を起こすため、20 歳代以下で共通語化が顕著である。

図 13 では、60 歳代を境にキラレルからキレルへの変化（可能動詞化）が確認でき、場面によることばの切り換えを尋ねた他の項目でも、60 歳代以下の世代で、上位場面における方言形から共通語形への切り換えが見てとれる（後掲表 2 も参照）。

図 11 買った

<白峰方言 1993>

№. B12 船 買った

字 桑 島

凡 例

世代	男	女
90	① Δ	
80	② Δ	① Δ
	③ Δ	② Δ
		③ Δ

世代	男	女
90		
80	① Δ	
	② Δ ●	

Δ コーカ
● カッタ

70	④ Δ	④ Δ
	⑤ Δ	⑤ Δ
	⑥ Δ	⑥ Δ
	⑦ Δ	⑦ Δ
	⑧ Δ	⑧ Δ
	⑨ Δ	⑨ Δ

70	③ Δ	① Δ
----	-----	-----

60		⑩ Δ
		⑪ Δ
		⑫ Δ

60	④ Δ	② Δ
	⑤ Δ	

50	⑭ Δ	⑭ Δ
		⑮ Δ
		⑯ Δ
		⑰ Δ

50		⑬ Δ
----	--	-----

40	⑱ Δ	⑱ Δ
		⑲ Δ
30	⑳ Δ	㉑ Δ
	㉒ Δ ●	

40	⑥ Δ ●	
30	⑦ Δ	④ Δ ●

20	㉓ Δ	21 Δ
		22 Δ

20		⑥ Δ
----	--	-----

中学	1 Δ	1 Δ
	2 Δ	2 Δ
	3 Δ	3 ●
	4 Δ	4 ●
	5 Δ	5 Δ ●
	6 Δ ●	6 Δ
	7 Δ ●	7 Δ ●
	8 Δ	8 Δ
	9 Δ	9 Δ
		10 Δ
		11 ●
		12 ●
		13 Δ ●

中学	1 Δ	1 Δ
	2 Δ	2 Δ
	3 Δ ●	
	4 Δ	
	5 Δ	

(『日本方言大辞典』 市子館より)

22 ハ行四段助動詞の分布形

— 「賢う」「読う」など—
 ■ の前置 コーカ (県など) など
 ■ 動詞にのり付助動詞と前置助動
 □ 前置助 ㄅㄅ (県など) など
 ■ その他

(『日本方言大辞典』 小寺雄より)

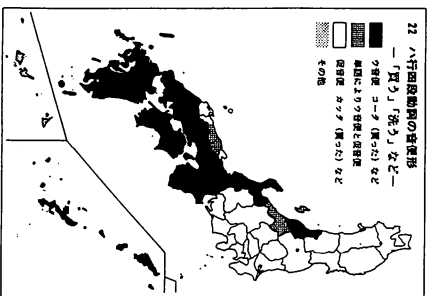


図 12 借りてきた

No. B13 順 借りてきた

<白峰方言 1993>

字 白 峰		
世代	男	女
90	① △	
80	② △	① △
	③ △	② ●
		③ △
70	④ △	④ △
	⑤ △	⑤ △
	⑥ △	⑥ △
	⑦ △	⑦ △
	⑧ △	⑧ △
	⑨ △	⑨ △
60		⑩ △
		⑪ △
		⑫ △
		⑬ △
50	⑭ △	⑭ △
		⑮ △
		⑯ △
		⑰ △
40	⑱ ●	⑱ △
		⑲ △
30	⑳ △	㉑ △
	㉒ △	
20	㉓ ●	21 ●
		22 ●
中学	1 ●	1 ●
	2 ●	2 ●
	3 ●	3 ●
	4 ●	4 ●
	5 △	5 ●
	6 ●	6 ●
	7 △ ●	7 ●
	8 ●	8 ●
	9 ●	9 ●
		10 ●
		11 ●
		12 ●
		13 ●

字 桑 島		
世代	男	女
90		
80	① △	
	② △	
70	③ △	① △
60	④ △	② △
	⑤ △	
50		③ △
40	⑥ △	
30	⑦ △	④ ●
20		⑤ ●
中学	1 ●	1 ●
	2 ●	2 △ ●
	3 ●	
	4 ●	
	5 △	

凡 例	
△	カッテキタ
●	カリテキタ

図 13 着られる

<白峰方言 1994>

№.74 題 着ることができる(能力可能)

字 白山麓		
世代	男	女
80	① -	
	② △	
70		① △
	③ △	② ・
	④ △	③ △
	⑤ △	④ △
	⑥ △	⑤ △ -
	⑦ △	⑥ ・
60	⑧ ●	⑦ ●
		⑧ △
50	⑨	
40	⑩ ●	⑩ ●
		⑩ -
30	⑪ -	⑪ ●
20	⑫ ●	⑫ ●
		⑬ ●
中学	⑭ ●	⑭ -
	⑮ ●	⑮ ●
	⑯ ●	⑯ ●
	⑰ ●	⑰ ●
	⑱ ● -	⑱ -
	⑲ ●	⑲ ●
		⑳ -

字 桑島		
世代	男	女
80	① △	
	② ●	
70	③ -	① -
60	④ -	② ●
	⑤ ●	
50		③ ● △
40	⑥ ●	
30	⑦ ・	④ ●
20	⑧ ●	⑤ ●
中学	⑨ ● -	⑥ ● -
	⑩ ●	⑦ ●
		⑧ ●

凡 例	
●	キレル キレルヨニナツタ キレッチャー
△	キラレル キラレツジャ キラレツチャワイ キラレツチャガ キラレルヨーンニナツタ キラレルヨーニナツタ キラレルヨーナツタ
-	キルコトガデキル キルコトガデキツチャ キルコトガデキルヨニナツタ キルコトガデケル
・	その他

また、虫の名など共通語の情報が多いものに関しては、若い世代を中心に共通語化が顕著である。ただ、「蚊」と「ぶよ」の調査結果からは、白峰では夜の「蚊」と昼に畑仕事などをしてしていると飛んできて血を吸う「ぶよ」を同じカの類と考え、ヨガ(蚊)ーカ(ぶよ)という呼び分けをしていたことがわかった。「蚊」においては共通語形カが急速に広まっているものの、ヨガも意外によく用いられていることがわかった。因みに、ヨガ、カ(カー)に対して聞かれるヨガメ、カーメなどの「メ」は、白峰方言に特徴的な虫や動物につく指小辞的接尾辞である。石川県内では白峰以外には聞かれないが、南に隣接する福井県の嶺北地方(筆者の方言である武生市方言ではネコメ<猫>、イヌメ<犬>)、

ウシメ<牛>、ノシメ<蚤>など）でも一部の動物や虫の名に卑称的に付くことがあり、他には関東の福島・栃木・茨城県と八丈島などにも分布する。

3. 白峰方言の変容と方言意識—珠洲市、金沢市との比較—

以下では、1993年に白峰村で行なった言語意識（方言意識・共通語意識など）に関する簡単な調査の結果と、これまで述べてきた言語変容との関わりについて考え、さらには、白峰村での結果と、最近全国14地点で同一の調査票を用いて行なった言語意識調査の金沢市（筆者が担当）での結果、また、昨年（1995年）9月に実施した奥能登珠洲市方言調査の際行なった方言意識調査の結果の一部との比較を行なう。

3.1 白峰ネイティブの方言意識

まず白峰ネイティブの方言意識について見ることにする。

表1からは、調査人数は少ないものの、白峰ネイティブの71%（3世代平均）が自分たちの方言を好きだと答えていることがわかる。この結果は後掲の珠洲ネイティブや金沢ネイティブの数字と比較してもかなり高いことがわかる。他の2地域と比べ、中学生の好感度の高さと、老年層よりも活躍層の好感度が高いことも注目される。この数字は「白峰という土地が好きですか」という問いに対する結果とも深く関わっていると思われ、「好き」と答えた人は老年層で27人（93%）、活躍層で17人（89%）、中学生で28人（97%）と極めて高い割合となっている。また、「将来方言はなくなった方がよいと思うか」という問いに対しても、「思わない」との答えが、老年層で21人（72%）、活躍層で15人（79%）、中学生で24人（82%）となっている。

こうした結果は、「言語島」と言われるほどに特徴のある自分たちの方言であるからこそ、白峰ネイティブの多くがそこに言語的アイデンティティを見

表1 あなたは白峰の言葉が好きですか <白峰1993>

	好き	嫌い	どちらともいえない
老年層	19人(68%)	2人(7%)	7人(25%)
活躍層	16(84)	0(0)	3(16)
中学生	18(62)	0(0)	11(38)

注）老年層（60歳以上）
活躍層（20～59歳）

出していることを物語るものではないだろうか。そのことが、先に触れた白峰村方言の言語変容のいくつかの具体相（若い世代も伝統的・特徴的方言形を比較的よく残していることや、女性に比べて男性の共通語化率が低いことなど）に少なからず反映していると思われる。ただ、真田信治・ダニエル・ロング（1992）の指摘にもあるように、アイデンティティーの強さは必ずしも方言を保持しようという意識に結びつくとは限らない、言い換えれば、衰退しつつある方言への好意的態度は必ずしもその方言を使用するという行動を伴うとは限らないという点には注意しておく必要があるようだ。

ところで、白峰村方言の調査結果からは、図7などでも見られたように、若年層を中心に男性に比べ女性の共通語化が目立つものがある。そのことと関連して、今回の意識調査の一つの項目に注目したい。

今回の意識調査では、東京、京都、大阪、金沢、福井の5つの地名を挙げ「好きな言葉の順に並べて下さい」という質問もしている。その結果を見ると、男性では、上の世代で東京の言葉に比べ京都や金沢の言葉を好きだとする回答、若い世代で東京や京都・大阪に比べ金沢の言葉が好きだとする回答の多さが目につく。一方、女性では、上の世代で京都・東京の言葉、若い世代で東京の言葉が好きだとする回答が、男性に比べかなり多くなっていることがわかった。こうした意識の違いが、特に若い世代での男性と女性の共通語化傾向の違いに反映していることは十分に考えられる。

また、自分の住んでいる土地に対する好感度と方言に対する好感度がともに高い白峰ネイティブの意識は、土地に対する好感度の高さに比べ方言に対する好感度が低い後述の金沢市の場合（表5参照）と対照的である。

さらに、白峰での意識調査では、方言と共通語の場面による切り換え意識についても尋ねている。あらかじめ指定した10の場面について、方言の混ざる程度を5段階で答えてもらうというものである。ほとんど共通語で話す場合は1、ほとんど方言で話す場合は5、半々ぐらい混ざる場合は3として判断を求めた。

表2は、各世代ごとに答えの平均点を出したものである。点数が高いほどその場面で方言的に話す、逆に低いほど共通語的に話す意識しているということになる。

この表から見えてくる世代あるいは場面と関わる特徴としては、どの世代も概して場面による言葉の切り換えを強く意識していて、場面⑤⑧⑨⑩で共通語

表2 場面による言葉の切り換え（白峰ネイティブ）

〈白峰 1993〉

場面	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
老年層	4.3	3.7	3.1	3.9	1.9	3.2	3.7	2.5	1.7	1.5
活躍層	4.8	4.5	4.4	4.5	1.5	3.8	4.0	2.3	1.2	1.2
中学生	4.0	3.9	4.0	3.3	1.6	2.0	3.2	2.2	1.5	1.2

場面 ①友達／②子ども（両親）／③孫（祖父・祖母）／④近所の店／⑤金沢のデパート／⑥村役場／⑦村の寄り合い／⑧学校で先生と／⑨東京から来た人に道を聞かれて／⑩旅行で東京に行き初対面の人に道を聞く

的な言葉、それ以外の場面では方言的な言葉を使おうとしていることがわかる。ただ、場面⑥「役場」は中学生にとっては共通語の場面と意識され、老年層・活躍層ではどちらかといえば方言的場面と意識されている。また場面③などでは、伝統的方言が次第にわからなくなっている孫に合わせて、なるべく共通語を使おうとしている老年層の人たちの実態が見えてくるように思われる。

3.2 珠洲ネイティブの方言意識

珠洲市方言については、先述のとおり 1995 年 9 月に調査を実施したが、言語意識関係の項目は臨地調査の際の面接方式ではなく、留置調査票によって行なった。

ここでは、方言意識に関するいくつかの項目について、白峰ネイティブの場合と同様に 3 世代（老年層：60 歳代以上、活躍層：20 歳代～50 歳代、若年層：10 歳代）に分けてその結果を見ることにする。

表 3 からは、若年層（10 歳代）の人数が少ないものの、珠洲ネイティブの 55 %（3 世代平均）が自分たちの方言を好きだと答えていることがわかる。この数字は先の白峰ネイティブよりも低く、後掲の金沢ネイティブの数字より高い。この数字からは、いわゆる珠洲市が自分たちの方言に対する好感度で、白峰と金沢の中間的位置にあることを示している。また、「珠洲の言葉を後世に残したいと思うか」という問いに対しては、「思う」が、老年層で 12 人（63%）、活躍層で 23 人（51%）、若年層で 2 人（20%）となっており、これまた白峰より低く金沢より高い数字となっている。

以上の数字から見える珠洲市の傾向は、方言の変容に関する白峰と金沢の現

表3 あなたは珠洲の言葉が好きですか <珠洲1995>

	好き	嫌い	どちらともいえない
老年層	17人(77%)	1人(5%)	4人(18%)
活躍層	25(54)	3(7)	18(39)
若年層	3(33)	0(0)	6(67)

注) 老年層 (60歳以上)
 活躍層 (20~59歳)
 若年層 (10歳代)

表4 あなたは共通語が好きですか <珠洲1995>

	好き	嫌い	どちらともいえない
老年層	11人(52%)	0人(0%)	10人(48%)
活躍層	21(45)	1(2)	25(53)
若年層	2(22)	1(11)	6(67)

状と比較しても一致した傾向であり、方言の変容に方言話者の人たちの言語意識が深く関わっていることを予想させる結果となっている。

3.3 金沢ネイティブと金沢ノン・ネイティブの方言意識

このことについては、すでに加藤和夫(1995)で第一次の報告をしている。詳しくは、他の全国13地点との比較も含め、拙稿およびそれが載る『変容する日本の方言』を参照されたい。

金沢方言の意識調査は1994年11月~1995年1月にかけて、金沢ネイティブの3世代の男性(老年層<60歳以上>、活躍層<25~40歳>、若年層<高校生>)各50名とノン・ネイティブの活躍層<25~40歳>男性50名の計200名を対象に実施した。

表5には金沢ネイティブとノン・ネイティブの金沢という土地、金沢の方言に対する好感度を示した。

表5において特徴的ことは、拙稿(1995)でも言及したとおり、金沢ネイティブの8割程度の人が金沢という土地を好きだと答えながら、金沢の方言を好きだと答えた人が3世代平均で5割にも満たないということである。自分たちの方言に対する好感度では、同一の調査票で調査した全国14地点(札幌、弘前、仙台、東京、千葉、金沢、松本、大垣、京都、広島、高知、福岡、鹿児島、那覇)の中でも、大垣、千葉に次いで下から3番目の低さであった。

表5 金沢ネイティブ・ノン・ネイティブの土地と方言に対する好感度

	金沢が好き	金沢の方言が好き	
ネイティブ老年層	3 世代平均 80%	54%	3 世代平均 47%
〃 活躍層		46	
〃 若年層		40	
ノン・ネイティブ活躍層	74%	32%	

前述の白峰のように土地に対する好感度と方言に対する好感度がともに高い地域と違い、土地に対する好感度と方言に対する好感度のギャップが大きい金沢市の場合は、自分たちの方言に対してアイデンティティーを確立しにくい状況にあるようだ。白峰方言のような独特の特徴をそれほど持たず、しかも北陸の中核都市として他県からの人の入り込みが多い中で、全国共通語や地方共通語を意識せざるを得ない環境が、金沢ネイティブに「隠れた方言コンプレックス」とも言える心理を形成しているらしい。

金沢方言の場合、基本的には関西方言の特徴（アクセントを含み）をその基盤としながらも、アクセントでは一部共通語アクセントの特徴も有し、また音韻的には東北方言に通じるものもみられる。全体的には関西方言的とされながらも関西方言に極めて近いかと言うとそうでもなく、かと言ってこれが金沢方言（北陸方言）だというような全国的認知度をもった特徴も少ない。そのあたりが、金沢ネイティブにとって自分たちの方言に今一つ存在意義を見出しにくい理由になっているようで、このことがある種の方言コンプレックスに結びついていると思われる。加えて金沢の場合は、日本三名園の一つに数えられる兼六園の存在とともに「加賀百万石の城下町」「北陸の小京都」「古都金沢」といった観光キャッチフレーズで作り上げられた美しい都市イメージがある。その結果、都市イメージと方言イメージの間に大きなギャップが生まれている町であることも、金沢方言の存立に少なからぬ影響を与えていると考えられる。

このように、白峰方言と金沢方言をめぐる意識の違いは、石川県内方言の中の両対極を示しているものと言えそうである。

4. おわりに

以上、石川県内の方言の中でもその古態性や独自性で注目されてきた白峰村

方言の現状の一部を、世代差・性差を中心に報告し、あわせて、それらと言語（方言）意識との関わりについても若干の考察を試みた。本稿は、白峰村方言の調査結果のごく一部のものであり、第一次の報告とも言うべきものであるが、今後は、同じ石川県内でも、中心地である金沢市や能登半島の北端に位置する珠洲市の方言の変容の様相と比較しつつ、本稿でも一部取り上げた言語意識の問題もより掘り下げながら、さらに考察を深めたい。

[参考文献]

- 岩井隆盛（1959）「方言」（『白峰村史 下巻』 白峰村役場）
 岩井隆盛（1962）「白峰方言の分布と変化」（『白峰村史 上巻』 白峰村役場）
 上野善道・新田哲夫（1985）「金沢アクセントの世代別変化」（『国語研究』49 國學院大学国語研究会）
 上野善道・相沢正夫・加藤和夫・沢木幹栄（1989）「日本方言音韻総覧」（『日本方言大辞典 下巻』 小学館）
 加藤和夫（1995）「隠れた方言コンプレックス」（『変容する日本の方言』＜『言語』95・11 別冊＞ 大修館書店）
 川本栄一郎（1974）「石川県手取川流域の方言分布」（『金沢大学教育学部紀要』23）
 川本栄一郎（1992）「石川県方言」（『現代日本語方言大辞典 1』 明治書院）
 真田信治・ダニエル・ロング（1992）「方言とアイデンティティ」（『言語』21-10）
 佐藤亮一監修・佐藤亮一・加藤和夫他5名執筆（1991）『方言の読本』 小学館
 徳川宗賢・真田信治編（1991）『新・方言学を学ぶ人のために』 世界思想社
 北國新聞社編集局編（1995）『頑張りまっし金沢ことば』＜加藤和夫編集協力＞ 北國新聞社
 柳田征司（1993）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』 武蔵野書院

付記：本稿は、北陸古典研究会平成8年新春研究発表会（1996年1月27日 KKR加賀）における口頭発表「石川県方言の変容と方言意識—古態性の消失と新しい方言の成立—」、および平成7年度金沢大学日本海域研究所「人文科学研究部・社会科学部」研究例会（1996年3月19日 金沢大学）における口頭発表「白山麓白峰方言の変容と方言意識」の発表原稿をもとに書き改めたものである。